CLA Award 2026

優　秀　賞


①

石田梅岩記念館

株式会社神田設計
吉川明宏
アトリエ心庭
鈴木邦浩
株式会社アルダー環境設計室
眞弓浩二
塩田有紀建築設計事務所
塩田有紀

作品概要

作品名――石田梅岩記念館
所在地――京都府亀岡市東別院町東掛六田18番地
発注――亀岡市
設計――（統括・建築設計）塩田有紀建築設計事務所 塩田有紀
（外構デザイン監修）アトリエ心庭 鈴木邦浩
（外構基本設計）株式会社アルダー環境設計室 眞弓浩二
（外構実施設計・積算協力）株式会社神田設計 吉川明宏
監理――（統括・建築）塩田有紀建築設計事務所 塩田有紀
（外構）株式会社神田設計 吉川明宏
施工――（建築・外構）栄・関西・丸正特定建設工事共同企業体
設計期間――2019年10月～2024年3月
施工期間――（造成）2023年10月～2024年2月
（建築・外構）2024年6月～2025年3月
規模――2998.11㎡
主要施設――記念館、東掛生命庭、回遊式園路、空石積

作品評

石田梅岩は江戸時代を代表する思想家であり、人は「天地自然と一体」の存在であると説いた。その思想は、自然を人間から切り離して眺めるものではなく、人の暮らしや営みもまた自然の一部として捉えるものであった。本作品の価値は、この石田心学の根幹を、記念館という建築だけでなく、梅岩が生まれ育った里山の風景そのものによって表現したことにある。

計画では、生家と里山を主役とし、記念館を風景の中に慎ましく位置づけている。地域の石材による石積み、流れ、草地、既存樹木を継承し、畔の草刈りなど地域住民の日常の営みまでも景観を育てる行為として受け止めている。そこには、新しい景観を「つくる」のではなく、この土地に受け継がれてきた自然、歴史、暮らしを「読み」、次代へつなぐ姿勢がある。

思想を展示物として「見る」「読む」だけではなく、風景の中を歩き、自然と人との関係を身体で「感じる」場へと昇華したことを高く評価したい。思想を風景に翻訳し、土地の記憶を未来へ継承する――そこにランドスケープ職能の本質的な役割が示されている。


②


③


④


⑤


⑥


⑦


⑧


⑨

①府道側全景　②山側全景（お墓から見下ろす）　③苔むした桝　④⑧⑨小学校の遠足（記念館でおにぎりを握って庭で食べる）
⑤梅岩ゆかりの蓮と寄進された欄干。園内に梅岩を顕彰の足跡が集積する。　⑥市内の菊花展の菊が飾られる
⑦田植：地域の営みとともにある風景　①②写真：鈴木文人

里山の「天地自然と一体」を体感するランドスケープ

本ランドスケープは「梅岩の里生誕地整備事業」の一環として、石田梅岩記念館とともに整備された。

石田梅岩（1685-1744）は、道徳と経済の両立を説いた江戸時代の思想家で、最盛期には全国182もの講舎で学ばれた「石門心学」の祖である。本事業では、各地の講舎で受け継がれてきた遺品や書物を集約・保存する収蔵庫を核としながら、屋内外に多様な学びと交流の場を創出している。

周辺は「梅岩の里」と呼ばれ、江戸時代とさほど変わらない里山に梅岩の生家が現存している。周囲の田畑を含め、現在もご子孫の暮らしが営まれている場所である。

人は「天地自然と一体」であると説いた梅岩。この地で何より大切にすべきものは、生家と、梅岩が幼少期を過ごした里山の風景であると考え、それらを主役として尊重する景観を形成した。

山側には、湧水を生かした流れを設け、生家や墓所などを巡る回遊園路を計画、これまで寄進されてきた石碑や樹木を再配置している。来訪者が歩きながら、生誕地の風景と歴史、梅岩を顕彰してきた人々の営み、そして風や水、生き物といった里山の自然に触れ、それぞれの時間を過ごせる場とした。

景観全体の基壇となる府道側の斜面には、地元の石材を用いた空石積みを施し、生家の石積みとの連続性を生み出した。田圃との間は草地とし、年月とともに畦と草地が馴染み、一体的な田園風景となることを目指している。石積みや畦は、地域の人々にとり暮らしの一部でもある。暮らしの延長で地域の人が関わり続けることで、計画地と周辺の風景は真に一体のものへ育っていく。

里山の環境と地域の文化、そこに関わる人々の活動の積み重ねを受け継ぎながら、梅岩を顕彰する思いと地域への愛着を、静かに未来へ育んでいく場。現在では、地元小学校の遠足や墓前祭などの恒例行事、地域の交流会、遠方からの来訪者との交流を通じて、のどかな里山の風景に新たな営みと歴史が重なり始めている。